

私の出会った

辰巳泰子

歌人



辰巳泰子

水原紫苑

辰巳泰子は、笑顔の美しい人である。もともと文楽人形のような、色白の、頬の豊かな美しい人だが、何かのきっかけで笑顔を見せられると、しんと心を打たれてしまう。この上なく素直で切ない感じなのだ。

辰巳さんに初めて会ったのは、穂村弘さん、加藤治郎さんと同じく、中央大学のシンポジウムの時である。髪はショートヘアだったような気がするが、よく覚えていない。長めのフレアースカートのジャケットを着た、ひどく若い女の子がいて、はにかむように座っていたが、いざパネルディスカッションが始まって番がまわって来ると、喋ること喋ること、重みの利いた声で歌を語ってやまないのだ。もつともこの日の話は、みんな滅茶苦茶で、私など実に正気の沙汰とは思われないことを熟をこめて喋ってしまったのだから、辰巳さ

んだけが浮いたというわけではない。でも、何だか肝のすわった女の子がいるなあという感じは心に残った。

それから辰巳泰子の歌を見つけると一生懸命読むようになった。彼女はたしかその春頃、角川短歌賞の候補に入っていたのではなかったか。歌にこもる息の強さが好きで、読んでいるうちに、辰巳さんや加藤さんや大塚寅彦さんや荻原裕幸さんが出していた同人誌「フォルテ」に私も誘ってもらい、仲間になった。辰巳さんは大阪にいて、学校の先生をしていたのだった。今では東京住まいの彼女にすっかり慣れて、彼女の第一歌集『紅い花』の時代が遠くなつかしく思われる。私たち（とは言っても彼女のほうがかなり若い）はまだそんなに年取ってもいないのに、もう振り返る風景があるのはおそろしいことだ。東京

にいた加藤さんはこの秋に名古屋に転動した。しかし、不思議なのはお世辞ではなく辰巳さんの雰囲気だんだん若くなって行くことである。『紅い花』を出した頃は大人の女という感じだったが、八二君を生み、第二歌集『アトム・ハート・マザー』を出して二年経った今は少女のように見える。幸福のしるしだろうか。辰巳さんは十代から歌を作り始めたという。紀野恵さんもそうだが、天性のうたびという場合には必ず早熟の才という条件が含まれるように思う。私は高校生の時に授業で歌を作り、面白くなって少しは続けたが、半年もするといやになってしまった。本当に歌に出会ったと思うのは二十代も後半である。それは歌に向かう感性のどこかに欠落が出るのではないかと恐れている。辰巳さんは何故そんなにも早く歌に出会うことができたのか、今度聞いてみたい。彼女は美術の方面に進もうとしていたらしいし、短歌のほかにも小説や詩や、いろいろなジャンルを選ぶ可能性があったのでは、という気がするからだ。

歌を作るのに疲れてしまったと感じる時、この人がいる限り私も歌わなければと思わせてくれる歌人のひとりが、辰巳泰子である。ありがたい辰巳さん、これからもよろしく。

(みずはら・しおん「中部短歌」所属・「NHK歌壇」番組進行役)